

豊かな気持ちで橋梁の建設を

横浜国立大学 教授 工博

Ikeeda Shoji
池田 尚治



華の都パリは、シャンゼリゼ通りやノートルダム寺院の印象ばかりでなく、アレキサンドル3世橋やアンバリッド橋の優雅な姿のイメージで構成される。特にアレキサンドル3世橋の絢爛豪華な装飾は、パリを華の都と呼ぶにふさわしい役割を無意識に植え付けてくれるような気がしてならない。翻って現在の我が国の橋梁建設のスタンスはコスト縮減や機能主義が最優先であり、また直下型地震にも耐えるような非線形の挙動を追及することに関心が集まっている。技術者として力学的合理性を追及することは極めて重要なことであり、また、コストを最小にして安全な社会基盤を構築することは社会からも強く求められていることである。一方、美しい橋を風景の中で楽しむことを社会が望んでいることは、パリの華やいだイメージを世界中の人々が好んでいることから明らかなことである。橋梁技術者が仕事に追われていると、単に業務を遂行することに専念し、豊かな心を持って橋の建設や管理に従事できない場合が多いのではないかと懸念されてならない昨今である。橋梁の姿は長年月にわたって市民の眼に触れるものであり、また日常生活で橋梁が利用されていることを考えると、橋梁が人々の心の中に無意識に入り込んで何らかの人格形成に影響を与えていると思われる。

以上に述べたことは、これから述べることのバックグラウンドであり、橋梁技術者がどのような視点で橋梁を認識しているかということである。

橋梁とひとことと言っても、町の中の川に架かる橋、田園の中の橋、高速道路の連続した高架橋、街路上の高架橋、海峡を渡る長大橋、等々極めて様々である。これらを橋梁という同じ言葉であるが故に同一のものとして本テーマの対象として思考することは必ずしも得策ではないと思われる。そこで、橋梁について考える場合にまずどのような状況の中に橋が設置されるかをはっきりと分類することである。河川や海峡を渡る橋梁と市街地に高架で設置される橋梁は、はっきりと区別する必要がある。市街地の街路上の高架橋は公園の中の構築物となるようなフレンドリーなものが好ましく、大型の構築物を突出させるのは好ましくないと思われる。ドイツの Ludwigshafen 市は街の真ん中の鉄道駅の上に長大鋼斜張橋が存在し、街を独特の雰囲気になっている。この斜張橋は決してフレンドリーな感じは与えていないと思われる。一方、ロンドンのテムズ河に架かっているタワーブリッジは河川上とは言え、フレンドリーなものである。これは恐らくタワーブリッジに歩道があることと、タワーの上に登り、跳開時でも歩いて渡ることができるからだと思われる。市街地に大型橋梁をやむを得ず建設しなければならない場合にはタワーブリッジのようにタワーの上に登れる等の施設を持たせることも重要なことと思われる。前述の Ludwigshafen の斜張橋もタワーの上に展望台を造ればイメージが相当に変わるはずである。

高速道路の高架橋も地元の人がエンjoyできるように自転車道や遊歩道を併設してフレンドリーな構築物にして欲しいものである。

コスト縮減ばかり頭に描いていると発想まで縮減しかねないので、是非とも豊かな気持ちで橋梁が建設されることを望みたい。真に価値ある橋梁の建設は未来に対する意義の大きな投資である。架設時の安全性についての一層の配慮も重要である。